石川県立美術館だより

BIJUTSUKAN DAYORI

第350号　平成24年12月1日発行

石川県指定文化財　三世　明峰素哲頂相
－大乗寺の文化財より－

畝村直久　　女（ポニーテール）
－石川の近代彫刻をふりかえって－

■前田家の雅
－名物裂と能装束－

■大乗寺の文化財
－加賀に伝わる曹洞宗の名宝－

■新保甚平展 －風景巡礼－

■石川の近代彫刻を
ふりかえって

新保甚平　赤い水門
－新保甚平展より－

前田育徳会尊經閣文庫分館

前田家の雅
－名物裂と能装束－

12月1日(土)～12月24日(月･休)　会期中無休

前田家の染織品コレクションには名物裂と能装束があります。名物裂とは主に中国の宋から清の時代に製織され、鎌倉・室町時代から江戸時代中期にかけて日本に舶載された金襴、緞子、間道、錦など多彩な裂地類の総称です。わが国の茶道など近世文化の成立に大きな影響を与え、書画の表装裂や、名物茶道具の仕覆として、当時の優れた鑑識眼をもつ茶人たちによって多くが選ばれたものです。名物裂の収集は三代藩主前田利常の収集によるもので、寛永十四年（一六三七）、当時唯一の海外への窓口であった長崎へ家臣を遣わせ、買い求めさせたといわれています。

能楽は古くは申楽の能と呼ばれ、室町時代の足利将軍家の庇護のもとに、観阿弥・世阿弥父子によって幽玄能が大成されます。江戸時代には式学となり、前田家では代々の藩主が好み、華やかな能装束が収集されました。現在前田育徳会が所蔵する能装束の中には、畳紙に「古渡　無色金入蜀織／御唐織／嘉永五年（一八五二）御仕立…」の墨書がある古渡りの裂を用いた装束があります。（写真）また、室町将軍足利義政が「二人静」の演能に着用したとされる「双鳳丸文様金襴」は、この演能に由来して「二人静金襴」と呼ばれ、名物裂の金襴の代表格となっています。このような名物裂と能装束の雅の世界を紹介いたします。

色無金入蜀江形大丸紋唐織

第２展示室

大乗寺の文化財
－加賀に伝わる曹洞宗の名宝－

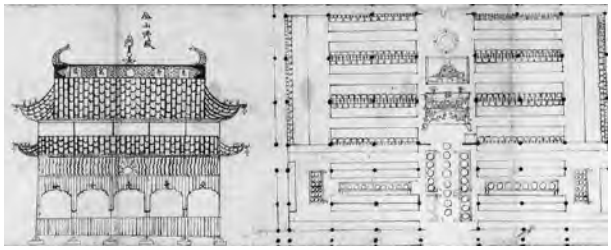
12月1日(土)～12月24日(月･休)　会期中無休

曹洞宗と言えば開祖道元が越前に開いた永平寺、そして現在の本山がある横浜總持寺が思い浮かびます。しかしその歴史をたどると、輪島門前の總持寺祖院が明治以前の本山とされています。曹洞宗四世の瑩山紹瑾が、能登の諸嶽観音堂に招かれ、寺号を總持寺、山号は諸嶽山と改名して禅院としたことにより始められたものです。

その瑩山は加賀大乗寺の二世として知られます。大乗寺より能登に赴いて宗勢を広めたのですが、この時代は大乗寺が加賀曹洞宗の中心であったことを示しています。大乗寺は永平寺以外で最初に建てられた曹洞宗寺院であることから、「曹洞宗第二の本山」とも称されました。鎌倉時代末、永平寺より招かれた徹通義介が野市（現在の野々市）にある真言寺院を禅寺として開山しました。それが大乗寺の始めです。このとき徹通は道元の伝来した数々の文化財を大乗寺に持ち込みました。今回展示する『佛果碧巌破関撃節』（一夜碧巌集）や『支那禅刹図式』（寺伝五山十刹図）はその代表的なものです。

その後、寺地は木の新保（現在の金沢市本町）、本多町と移り、元禄の頃に長坂に移転して今日まで続いています。

現在、大乗寺に伝世する文化財は当館に一括寄託されており、古文書・絵画・工芸など総数およそ四百点にのぼります。今回の展示では、重要文化財をはじめとする多くの文化財を紹介します。



重文　支那禅刹図式

第３展示室

新保甚平展
－風景巡礼－

12月1日(土)～12月24日(月･休)　会期中無休

新制作協会会員の洋画家新保甚平氏の金沢美術工芸大学卒業時から現在までの創作の歩みを二十五点の作品によりご覧いただきます。

新保氏の描画法はテンペラと油彩による混合技法を主としたもので、正面構図や装飾性と省略性、空間の扱い、しっとりとした艶消しの画面など、日本画に通じる叙情性を漂わせています。

メインとなるテーマは各地の水門や発電所で、実像と水面に映える鏡像とが交差した風景が、色彩を抑えて描き続けられてきました。実像と鏡像との組み合わせは千変万化で、尽きることのない興趣を作家は感じてきたのでしょう。そして、平成十年以降、色彩を一気に解放したかのような、イタリアの明るくカラフルな風景が加わり、新保氏の描く世界は大きく広がりを見せました。構図の自在性と表現の多様性が増し、これまで描いてきたテーマを様々な角度から検証するかのようです。

新保甚平氏が謙虚に描き綴ってきた風景画の世界を、どうぞご堪能ください。

新保甚平氏略歴

昭和二十四年小松市に生まれる。パリ国立美術学校留学を経て五十二年金沢美術工芸大学油絵科卒業。五十六年新制作協会展初入選、平成四年同展新作家賞（十八年、十九年新作家賞）。七年昭和会展優秀賞。十年文化庁派遣芸術家在外研修員としてイタリアで学ぶ。二十二年新制作協会会員推挙。

新保甚平　黄金の時 アルノ川　1999年

第４展示室

石川の近代彫刻をふりかえって

12月1日(土)～12月24日(月･休)　会期中無休

本年は奇しくも、当県を代表する彫刻家たちの遠忌の区切りを迎える年回りとなっているといえましょう。先ず今年四月～五月にかけ特集展示を開催致しました、吉田三郎は今年没後五十年でしたが吉田三郎に止まらず、畝村直久没後五十年。長谷川八十同三十年。田中太郎同二十年。米林勝二同十年と揃って没後の区切りを迎える年となっております。本展は畝村・長谷川・田中・米林の四氏について館蔵品を中心にその足跡をたどるものです。

さて以上四人の彫刻家たちは、作風がそれぞれ異なることは元よりテーマや表現様式ほか所属した美術団体、また彫刻制作以外でもその生涯に於ける活動も大きく異なっており、各作家の人となりを含めそれぞれ個性的な展開を示しています。

金沢市生まれの畝村直久は戦後の具象彫刻の発展を予感させるシャープで都会的な作品を制作し日展で活躍しました。金沢市生まれの長谷川八十は二科会から二紀展に参加して活躍、絶えず斬新な造形を模索しました。また金沢美大教授として後進の指導にも当たりました。七尾市生まれの田中太郎は院展で活躍し、得意とした木彫ほか塑造でも多彩な制作を行いました。金沢市生まれの米林勝二は幅広く彫刻制作を行ったほか金沢大学教授として後進の指導にも当たり、また地域の文化財行政などにも長年携わりました。以上の本県を代表します多彩な彫刻家たちの作品をご覧下さい。

長谷川八十　軍鶏

12月の企画展示室

第7・8展示室

第97回 公募写真展 研展

12月14日(金)～12月19日(水)　会期中無休

東京写真研究会が主催する研展は、関東、中部、関西、北陸の四支部で構成されています。公募展は、会員部門と公募部門に分けられていて、今回は三六五点の作品が展示されます。北陸部においての入賞者は、会員部門が四名、公募部門も四名となりました。

合評会は十二月十六日（日）午後二時より行います。

◇入場無料

◇連絡先

金沢市東山二丁目二－八

土田貴夫

ＴＥＬ　〇七六－二五一－〇七二三

第8・9展示室

第22回 独立DO展

12月1日(土)～12月4日(火)　会期中無休

日本的フォーヴィズム（野獣派）の流れを汲む独立展は、昭和五年に結成され、須田国太郎や林武など、自由で個性強烈な作家を輩出していることで知られる日本有数の団体展です。

石川独立は、昭和五十四年に県内在住の独立展出品者を中心にＤＯ展として発足し、今回二十二回展を迎えます。メンバーは各自三～五点を出品し、初日の十二月一日（土）には批評会を行います。

◇出品作家

伊藤裕貴、乙部久子、金子顕司、京岡英樹、桑野幾子、桜井節子、田井　淳、西又浩二、堀　一浩、三浦賢治、村上有輝、吉川信一

賛助出品　寺島　穣

◇入場無料

◇連絡先　堀　一浩

ＴＥＬ　〇七六－二四六－〇七一一

第8・9展示室

第36回 公募日創展 ＆新院展選抜金沢展

12月22日(土)～12月23日(日･祝)　会期中無休

丹羽俊夫会長が石川県を基盤として創立し、今年三十六回展を迎えます。

理事長三宅厚史、副理事長今村文男をはじめ、県内外からの出品を中心に日本画百点余を展観。また新院展選抜金沢展に出品された秀作も多数展示致します。

◇主な出品者

北川真理子・松尾功一朗・伊藤夏子　南好乃・中村勝代・大窪昭子・牛丸美代子・北出朝之・保科誠・柴田輝枝・村中博文

◇入場無料

◇連絡先

金沢市窪一－二二三

丹羽俊夫

ＴＥＬ　〇七六－二四四－五九一六

第7～9展示室

平成24年度 志賀町を描く美術展

12月7日(金)～12月11日(火)　会期中無休

「志賀町を描く美術展」は、その名のとおり志賀町に関する題材を描いた絵画作品を展示する展覧会です。

例年、招待作品から県内外の一般作品まで約二百点余りの洋画・日本画・水墨画・水彩画・版画などの作品を志賀町と金沢市で展示しております。なお、開場式を十二月七日（金）午前九時三十分より石川県立美術館で開催します。

◇入場無料

◇連絡先

羽咋郡志賀町高浜町カの一の一

志賀町生涯学習センター

ＴＥＬ　〇七六七－三二－二九七〇

企画展Topics

村田省蔵展 －画業60年の歩み－

平成25年1月4日（金）～2月11日（月・祝）　会期中無休

〝稲架木〟（はさぎ）という漢字をルビなしで読める方はもう少なくなってきたのではないでしょうか。辞書で引くと、〝稲架木は田のあぜ道に沿って、たもの木やはんの木を植えて、稲の収穫時に木々に横木を渡して稲の乾燥に利用するもの〟などと書かれています。〝はさ〟と言って、臨時に木の棒を組んで稲を干す風景は以前はよく見かけましたが、これも農業の機械化が進んで最近はあまり見ません。この稲架木が立ち並ぶ景色を村田氏は越後で見て強く心惹かれたのでした。もう二十年近くこのテーマで描き続けています。

幹の枝は切り落とされ、頭頂に曲がりくねって枝が繁茂する稲架木は、一人の人間のようにも見えます。冬の田圃に雪をかぶって立つ稲架木、春先に今秋の実りを待つ稲架木、その隊列を見るとそれぞれが違っていて、個性や喜怒哀楽が託されているようにも思えるのです。作者の描く風景には、風景を自然として描くものと、風景と樹木を対峙させ自己の感興や思いを述べるものとがあるようにうかがえます。近年の稲架木を描く作品は、まさに後者で、これまでの人生を一本一本の木に託して描いている、そうした思いを強く感じます。

今回の展覧会では、学生時代の自画像から、金沢美大卒業時に小絲源太郎に出会って師事し上京、人物から風景へとテーマを移し、その後の試行錯誤を経て自己の作風を確立していく、そうした村田省蔵氏の画業の歩みを余すことなく示したいと考えています。

凛として　2009年　当館蔵

展覧会回顧

須田国太郎展 －没後五〇年に顧みる－

昭和七年、須田国太郎が銀座の資生堂ギャラリーで第一回個展を開いた際に、京都八坂の塔を描いた「法観寺塔婆」は出品されました。この時須田は四十一歳。ずいぶん遅い画壇へのデビューです。でも、その分じっくりと画面は思索され、構成されています。ポスターにも用いましたし、会場でも、真っ先にご覧いただくよう第七展示室の正面に壁面を立てて展示しました。

神秘的な佇まいで塔が奥にすくっと描かれ、その前に棒が何本か配置されています。電柱が杉木立を象徴するかのように画面の神秘性を高めているのです。須田はこの絵を商店街の通りの側溝を足場に描いたといわれています。卑近な現実といにしえの塔、現実を咀嚼し平面に再構築する須田の制作がよく現れた作品です。

しかし、この須田の絵画世界は難解なのでしょう。そして初期の作品はいずれも赤味を帯び、この色調も絵の難しさに拍車をかけているようです。最初「法観寺塔婆」を見たとき「エッ、こんなに赤い絵だったっけ」と驚いたものでした。当初から赤かったのか、下地が強く出て赤く変化してきたのか、不可解な色調でした。でも何度も見ているうちに、この赤がより絵の神秘性を増しているように思えてきたのです。

今回の展覧会が、須田国太郎という中央画壇のビッグネームにも関わらず、少数の方々にしかご覧いただけずに終わってしまったのも、この難解さがネックの一因と思えます。多くの方々にご覧いただけるような工夫を痛感した展覧会でした。

文化財現地見学報告

美濃の名刹をめぐる　－岐阜を訪ねて－

平成24年10月27日（土）～28日（日）

今回の文化財現地見学は、題して「美濃の名刹をめぐる―岐阜を訪ねて―」。意外に知られていない美濃地方の寺院を中心に、その文化や信仰に触れていただこうという企画でした。

初日、晴天にも恵まれ、バスは朝七時にＪＲ金沢駅を出発、一路多治見市の永保寺へ向かいました。今回は雲水さんの案内により、特別に国宝の観音堂・開山堂の内部にまで入らせていただきました。名勝の庭園とあわせてその落ち着いた美しさには感銘しきりでした。また、観音堂に収められる流木で組まれた厨子は珍しく、素朴で印象的な姿に心惹かれる方が多かったようです。

その後可児市へ移動して昼食をとり、願興寺へ向いました。女性のご住職に寺院の説明をいただき、霊宝殿では二十体以上の重文仏像を前に読経。心に響く凛としたお声に、願興寺の精神や仏像の心が感じられるようでした。

続いて関市、新長谷寺（しんちょうこくじ）へと向かいました。境内に入るとすぐ、整然と並んだ檜皮葺の伽藍建築が目に飛び込んできます。荘厳な室町建築に感嘆しながら奥の本堂まで進み、ご住職からお話をいただきました。

一日目最後は岐阜県博物館です。開催中の展覧会「飛騨・美濃の信仰と造形―古代・中世の遺産―」を学芸員の方の解説により鑑賞しました。岐阜県内の国宝・重文を含む文化財が展示されており、先に訪れた永保寺や願興寺からも仏像の出品がありました。「いつもはあのお堂の中にいらっしゃるのか…」と想像を膨らませていただけたのではないでしょうか。

二日目は朝から生憎の雨でしたが、心は晴れやかに岐阜市の乙津寺（おつしんじ）へ向いました。若さんやお庫裏さんに親しくご案内いただき、境内お堂をはじめ仏像や堂本印象筆の天井画など、ゆっくりと拝見することができました。いわゆる観光地ではないものの朝から参拝の方が見えており、若さんのお経も清々しく、地域に親しまれる寺院の姿が窺い知れました。

次に揖斐郡へ向かい、横蔵寺を目指しました。雨に佇む寺院の姿は静謐で心が洗われるようでもあり、最後まで熱心にご説明下さったボランティアガイドの方々のおかげで充実した時間を過ごす事ができました。珍しい舎利仏（ミイラ）や深沙大将立像なども興味深く、驚きとともに歴史の奥深さが感じられました。

華厳寺門前で昼食後、最後の見学地である華厳寺を拝観しました。雨が強くなる中、ボランティアガイドの方々の説明を受けながら長い境内を本堂まで歩みました。西国三十三ヶ所満願のお寺でしか見られないものが境内各所にあり、巡礼の心を感じられたようでした。

二日間に渡り、美濃地方を東から西へ横断するコースで進んで参りましたが、無事に行程を完了することができましたのも参加者の皆様の温かいご協力のおかげと感謝しております。早足になってしまったところもあり反省が残りますが、これからも皆様の期待に応えられる内容を検討して参ります。

どこでもミュージアム（学校出前講座）

九月末から十月にかけての学校出前講座は、小松市の国府小学校、第一小学校、東陵小学校、そして白山市広陽小学校の四校で開催されました。

出前講座ではゲームの要素を取り入れた鑑賞方法のアートゲームや、クラスの皆で一点の作品から見つけたこと、感じたことを出し合う対話型鑑賞などを行っています。一人で作品を見るより、作品について自分の考えを発表したり、友だちの意見を聞いたりして交流することで、鑑賞はぐっと深まります。そこで、私たち学芸員が子どもたちの前に立ち、子どもたちに意見や感想を尋ねながら授業をすすめています。しかし、初めて出会う私たちが進める授業の中、自分の感じたことを言葉にすることや、それを皆の前で発表することはなかなか勇気がいること。子どもたちの発言が少ない授業になることもありますが、子どもたちは皆の前での発言をしなくても、作品についてそれぞれ思いは持っていることは感じられます。

毎年たくさんの学校に伺いますが、授業で出会う子どもたちの様子も様々です。この出前講座が子どもたちにとって少しでも有意義な体験になるよう、活動のバリエーションを増やしたりしながら、子どもたちの様子に合わせた授業の進め方ができるようにと心がけています。

村田省蔵展関連イベント

講演会「これからの道」

村田省蔵氏（洋画家・芸術院会員）　聞き手　嶋崎丞（当館館長）

・**日時**：一月十三日㈰　午後一時三十分～

・**会場**：美術館ホール、聴講無料・申込不要

村田省蔵氏の画業の展開について、村田氏が当館館長との対談により語ります。

ミュージアムコンサート

・**日時**：一月十二日㈯　午後一時三十分～

・**会場**：美術館ホール、無料ですが整理券が必要です。

・「しゅうさえこ　日本の風景を歌う」

NHK『おかあさんといっしょ』第十四代うたのおねえさんとして活躍した声楽家しゅうさえこさんが、村田省蔵氏の描く風景をイメージして歌います。

・**申込方法**：下記の通り往復はがきで当館までお申込ください。

往信用の表面　〒九二〇－〇九六三　金沢市出羽町二－一　しゅうさえこコンサート宛。

裏面に申込者の〒番号、住所、氏名　電話番号。

返信用の表面　申込者の〒番号、住所、氏名

裏面は応募結果を印刷するので、何も書かないでください。

＊**締め切り**　十二月二十七日㈭必着。応募者多数の場合は抽選となります。

ギャラリートーク

村田省蔵展会期中、一月十三日以外の日曜日に、午前十一時から展覧会場にて担当学芸員が行います。五回を予定。展覧会観覧料が必要です。

十二月の行事予定

12月1日（土）	**■講演会　13時30分～　美術館ホール　聴講無料** 新保甚平展関連講演会 演題「もう少し…・」 講師／新保　甚平氏（画家新制作協会会員）

ご利用案内

コレクション展観覧料

一　般／三五〇円（二八〇円）　大学生／二八〇円（二二〇円）　高校生以下／無料

※（　）内は団体料金　毎月第一月曜日はコレクション展示室無料の日（十二月は三日）

十二月の開館時間　午前九時三十分～午後六時　カフェ営業時間　午前十時～午後七時

年末年始の休館日は十二月二十五日～一月三日です。（カフェは年中無休）

企画展Topics　村田省蔵展　－画業60年の歩み－

会期：2013年1月4日(金)～2月11日(月・祝)

診療室の女医さん　1949年

午後の町　1972年

雪明け　1976年　金沢市

ヴェネチヤの赤い館　1982年
松岡美術館

丘　1992年

春めく　1998年　当館蔵

次回の展覧会　会期：2013年1月4日(金)～2月11日(月・祝)

前田育徳会 尊經閣文庫分館	第2展示室	第3展示室	第5展示室	企画展示室
新春を寿ぐ ―天神画像を中心に―	雅の造形 ―茶道と能楽―	―清廉の女性美― 竹沢基展	明治の工芸	当館企画展 村田省蔵展 ―画業60年の歩み―

広告

明治10年8月、
加賀藩 前田家の出資により創業。

金沢支店／〒920-8686
金沢市南町5-28　TEL.076-263-5131

◉金沢第十二国立銀行開業免状の写
（北陸銀行金融歴史資料館蔵）

www.hokugin.co.jp

お客さまの「うれしい」を、私たちの「うれしい」に。北陸銀行

石川県立美術館だより
第350号〈毎月発行〉
2012年12月1日発行

〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580
Fax:076(224)9550
URL http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています